

「利他の精神」こそ「倫理」の礎

上廣哲治

健康維持のために妻と公園を散歩していると、チューリップやツツジが咲きほこっていました。例年ならそのまま通り過ぎてしまったかもしれません。しかし、感染症が人類を脅かしているいまも、人間の騒ぎに頓着なく季節は移っていくのかと思うと、感動を覚え、立ちどまって見入ってしまいました。

桜の季節に本格化した新型コロナウイルス感染症の流行は、初夏になってもやむ兆しが見えません。世界の感染者は約四〇〇万人、死者は二七万人を超えました*。一九一八―二〇年に全世界で大流行した「スペイン風邪（インフルエンザ）」は、当時の世界人口が約一八億人だったときに、その三分の一が感染し、約五〇〇〇万人が亡くなったといわれます。歴史人口学の速水融氏は、独自の調査で国内での死者が四五万人であることを明らかにしました。流行は三期に分かれ、第一波、第二波のあとでいったん鎮静化し、半年後に第三波がより強力なウイルスとなって襲ってきたそうです。収束までにほぼ二年かかっています。現在の新型コロナウイルスの流行が今後どのような推移するか予測はつきませんが、一年近くかかると語る専門家もいれば、初冬に第二波がくると警戒を呼びかける学者もいます。

パンデミック（感染症の世界的流行）と同時進行で、経済的なダメージも大きくなりつつあります。まさに、世界全体が危機に陥ったというべき状況です。フランスの経済学者・思想家のジャック・アタリ氏は数年前から著書で、これまでにないタイプのインフルエンザが流行する兆しがあると警鐘を鳴らしていました。その警告は活かされることなく今回のパンデミックが起きたのです。「この一〇〇年で最大の危機が今、人類のほぼ全体を襲っている」とアタリ氏は語ります。

新型コロナウイルスの流行は、感染症で人の命を奪うだけではありません。ロックダウン（都市封鎖）や営業自粛、外出禁止などで経済活動が停止し、商店の廃業や企業の倒産で大量の失業者を出します。経済学者は、日本では失業率と自殺率はほぼ並行して推移するので、失業率がもし一パーセント上昇すると自殺者が一〇〇〇人、いや人によっては二〇〇〇人以上増えると語ります。パンデミックを収束させたとしても、その後に来る不況でさらに人命が失われる可能性があるのです。

世界中の国々が感染拡大を早急に抑え込み、経済活動を再開させようと必死の施策を講じています。中国では、感染が広がった武漢市をロックダウンしました。人口約一一〇〇万の市民は街から出ることはもちろん、外出も禁じられたのです。違反者は処罰されます。こうした強硬手段をとった結果、二か月後には感染者はほぼいなくなり、いまは封鎖が解除され、経済活動も再開されているそうです。

中国ほど厳格ではないにしても、イギリス、フランス、イタリアなどヨーロッパの多くの国々も都市封鎖で感染を抑え込もうと悪戦苦闘しています。それぞれ程度の差はありますが、外出や移動の自由を制限して感染の拡大を防ぐことでは共通しています。

一方、早期に武漢市でのコロナウイルス発生情報を得た台湾は、素早く中国からの入国を禁じ、自国

の健康保険データベースを活用して国民の健康状態を監視するシステムを構築、感染を抑えたといわれます。また、韓国では短期間に大量の検査キットを製造し、ドライブスルー方式などで徹底した検査を実施、陽性者を隔離して収束を図りました。独自路線を突き進んだのはスウェーデンです。都市封鎖はせず、人との距離を保つ社会的距離の厳守などいくつかのルールを守ることを国民に呼びかけ、一人ひとりに「責任ある行動」を求めたのです。その背景には、多くの人を自然に感染させることで早期に集団免疫を獲得させて収束させるという戦略があるそうです。この政策には、国内外の医療専門家から異論が出されています。ところが国民の多くは政府を支持しているといわれております。

わが国では、四月初旬に緊急事態宣言が出され、外出の自粛、人との接触機会の七、八割削減、在宅勤務への移行などの要請が出されました。法による封鎖ではなく「要請」という形で国民に協力を求めたのです。こうした政策や防疫体制についてさまざまな意見が噴出し、混乱をきたしました。

さまざまな方策のなかでどれが最も有効なのかは今後の展開を見ないとわかりません。ただ政策に共通しているのは、人との接触を避け、自分が感染しないと同時に、人に感染させないということでしょう。それが一人ひとりの自由な意思に基づいて行われるときに感染を抑え込む真の力になるのではないかと思います。指示されたから従うのではない。イヤだけれど、我慢して行うのでもない。人類を襲う共通の危機を、力を合わせて克服するために進んで行動する。その一人ひとりの意思が大切です。自らの意思で行動する、そこには倫理の基本となる精神があるはずですよ。

そこで思い起こしてほしい事例があります。六年前の夏、広島県で豪雨による土砂災害が起こり七十人以上の方が亡くなりました。二度とこのような悲劇を繰り返すまいと県民ぐるみで防災運動が展開さ

れました。非常時の持ち出し品の準備、避難場所の確認など、県民の防災意識は高まりました。

ところがその四年後の夏、再び豪雨が襲い、広島県では土砂崩れや浸水で一〇〇人を超える方が犠牲になりました。人々の防災意識は高まり、非常時の知識や備えもあつたのですが、避難勧告、避難指示が出されても避難しなかった人がいたのです。「自分は大丈夫」「すぐに避難しなくてもいい」と危機を危機と認められず、自分だけは大丈夫と思ひこむ——いわゆる「正常性バイアス」にとらわれ、それが妨げになって逃げ遅れて亡くなったのでした。行動経済学者の大竹文雄おおたけふみおさんは、県民の方々と共同で、避難させるときにどのような呼びかけが有効なのかを調べました。そこでわかつたのは、「危険だから避難してください」という言葉がけではなく、「あなたの避難が周りの人々を救います」「あなたが避難しないと人の命を危険にさらします」という呼びかけが効果的だということでした。

「自分の命を守るため」という呼びかけでは避難しなかった人も、「人を救うため」「人を守るため」という目的ならば、率先して避難する。人を助ける、人を利することが行動をうながす引き金になります。生き物としての人間には、仲間を助けたいという「利他の精神」が備わっている。それが倫理の礎となっているのです。だから、人を利するときには倫理実践は楽しいものとなり、喜びとなるのでしょう。

私たちは、いま外出を控え、人との接触を減らすべく自粛しています。緊急事態宣言が解除されたとしても、しばらくは「新しい生活様式」を求められます。決して楽な生活ではありません。

では、われわれはバラバラに孤立しているのかといえ、そんなことはありません。この自粛も「新しい生活様式」も、人を守り自分を守る利他の精神で貫かれ、その精神で結ばれているからです。いまは辛抱の時。収束の暁あけぼのには、顔を見合わせて倫理実践の喜びを語り合おうではありませんか。